

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

## 母から学ぶ

北辰中学校三年

野田のだ

祐玄ゆうげん

私の家は、父と母が離婚してしまった。だから、とても母の大切さがわかる。

中学一年生の時、父と母が離婚した。子供は父の方に引き取られた。だから、私は父と暮らすことになった。離婚してから、数日程は思春期だったこともあり、全く苦しくもなかつた。しかし、そんな気持ちは最初の頃だけだった。時間が経つ程、母がいないという現実をつきつけられ苦しくなつた。

まず、毎朝の「おはよう。」という言葉が無くなつた。私は母に次いで早起きだったので、朝起きて、リビングへ行くと母がいた。そして、「おはよう。」と言つてきた。ほとんどあいさつを返さないでイスに座つて、朝ごはんが出てくるのを待つていた。しかし、今は、「おはよう。」と言つても誰もいないリビングに自分の声が響くだけ。そして、イスに座つていても朝ごはんは出てこない。「おはよう。」というたった一言で私は支えられていたのだと実感し、朝、私よりも早く起きて、朝ごはんを作つていた母を尊敬した。

それから、父が家政婦をやとうことにした。最初、私は賛成だった。テレビで家政婦をやとうている家を見て、少し懂れていたからだ。しかし、本当に最初だけだった。やはり、自分の家に知らない人がいるというのは抵抗があつた。もう一つ、自分の家なのに、家政婦さんと二人きりになつたときに緊張して全く落ち着くことができなかった。私はそれが嫌だった。だから父に家政婦をやとうのは、もうやめてほしいと伝えた。すると父は、

「最初は賛成しとつたやんけ。」

と怒つた。でも、家政婦をやとうのはやめてくれた。私は、母の温かさを思い出した。学校から家に帰ると、家政婦さんとは違う、感情のこもつた「おかえり。」という言葉と、その日学校はどうだったかを聞いてきた。

こんな小さな会話が私にとつてかけがえのないものだったのだと感じた。約一ヵ月後、さすがに父だけでは、家事が大変だということで家の新

たなルールが作られた。お手伝い制度である。しかし、その時私は、勉強と部活の両立で疲れ、寝る時間が遅くなつていたので、この制度は、とても大変だった。だが、風呂掃除と皿洗いだけだったので幸いだつた。母はこの二つ以外にも、たくさんの家事を毎日こなしていたのだと思うと、時間があるにしても、すごいなと思つた。その時、私達家族のために、洗濯や料理などをこなす母の姿が目につかんだ。母がまだ離婚する前、私はゲームばかりやっていて暇だつたのに、手伝いをしなかつたことを後悔した。手伝つてと言われても面倒くさいと断つてしまつた自分にとつても腹が立ち、母には申し分けない気持ちとそんな私を許してくれたことに感謝した。今では、前に比べて家事を手伝うようになったと自分では思つている。

土日の休みの日に、泊りにこんかと母から連絡があつた。母と会うのは、離婚して以来だったので楽しみだつた。買い物へ行つたり、休憩がてらカフェに行つたりと母との時間を楽しんだ。離婚する前は、母と出かけることは、ほとんどなかつたので、こんなに楽しいんだと思つた。夕食は母が作つてくれた。久し振りの母の料理はとても美味しかった。なつかしの味つて何なんだろうと思つていたけど、これがそうなのかと思つた。優しく、心が包みこまれるような味。私は、この味を忘れられなくなつた。それから、たまに、母の所へ遊びに行つている。

母の大切さ。私は、母を失ふことで母の大切さに気がついた。母が日常でしてくれていたことは、私を支える大事なものだつた。母には感謝をしてもしきれない思いでいっぱいだ。私は母に恩返しをしようと思つた。私が今まで感じてきたたくさんの感謝の気持ちを伝える。これほど大切なことだと思ふ。これらのことに私は母を失つて気付いた。失う前に気付いたらと今でも思ふ。これからは、自分が後悔をしないように生きるために、先の事を考えて行動をするようにしたいと思ふ。